

はじめに

第1章 漢字が伝来する 六世紀まで

1 日本語が漢字と出会う 16

応神朝に漢字が伝来した？／日本に固有の文字はない／日本語が漢字で記される／漢字の伝来とはどういつことか／漢字が土器などに記される

2 中国との関係が強まる 22

中国に統一王朝が出現する／冊封体制が確立される／金印が与えられる／卑弥呼が魏に使者を遣わす

3 漢字を本格的に受容する 28

朝鮮半島情勢が流動化する／高句麗が勢力を拡大する／百済が建国される／伽耶が連合国家となる／応神朝は四世紀末前後である／先進の学問・技術がもたらされる／『論語』『千字文』が伝来する

4 国内で漢文表記が本格化する 36

倭の五王が宋に朝貢する／渡来人が朝廷に仕える／渡来系氏族が誕生する／国内で漢文の作成が始まる／稻荷山古墳鉄剣銘が製作される

5 儒学・仏教が伝来する 42

朝鮮半島に三国が鼎立する／伽耶が滅亡する／五経博士が来日する／仏教が伝来する／崇仏派が排仏派を退ける／仏教の興隆が図られる／訓が成立する／正格でない漢文が伝わる

6 万葉仮名が使われる 50

漢字には仮借の用法がある／万葉仮名を分類する／略音仮名は遅く出現する／漢字音が日本語化されていく／代表的な音には呉音と漢音がある／呉音が百済経由で伝わる／呉音より古い字音も使われた／万葉仮名はほぼ呉音に基づく

第2章 漢字が浸透する 七・八世紀

1 中国と直接に交流する 60

渡来人が大陸文化を陸続と伝える／朝鮮半島での権益奪還をまくろむ／遣隋使が派遣される／聖徳太子が小野妹子を隋に遣わす／遣隋使に留学生が随行する／留学生が帰国して活躍する／遣隋使以外にも留学した人がいた／遣唐使が派遣される／境部連石積らが『新字』を編集する

2 漢字の用法が日本化する 70

十七条憲法・三教義疏が作られる／和化漢文が出現する／朝鮮半島の俗漢文が影響を与える／漢文が訓読される／木簡に音義が記される

3 二つの字音体系が伝わる 78

遣唐使が漢音を伝える／呉音と漢音は対応関係がある（声母）／呉音と漢音は対応関係がある（韻母）／音博士が任命される／漢音の学習が大学寮で義務づけられる／宗派仏教が伝来する／呉音が仏典の読誦に用いられる／『日本書紀』では漢音の万葉仮名を用いる／訓仮名が成立する

4 海外を知る人々が活躍する 89

百済が滅亡する／百済の貴族や役人らが亡命する／奈良時代の遣唐使は実質的に五回であった／遣唐使は五〇〇人ほどで編成された／阿倍仲麻呂・吉備真備ら、海を渡る／留学生の吉備真備が重用される／外国人が遣唐使船で来日する／傑出した人材が遣唐使に選ばれる

5 漢文の理解が進む 100

律令が制定される／大学寮が創設される／高級官僚をめざして試験に挑む／『論語』は必修であった／『文選』は当時の基本図書である／宣命書きが出現する／柿本人麻呂歌集に二つの表記様式がある／付属語を省略せずに表記する／万葉仮名文が広まる／山上憶良らの一行が『遊仙窟』を将来する

第3章 漢字が定着する 九〜一二世紀

1 唐風が重んじられる 112

唐風文化が謳歌される／唐風に倣う／九世紀の遣唐使は二回だけである／遣唐使船の航路は三コースあった／最澄や空海らが派遣される／入唐八家が多く、の経典を伝える／入唐判官菅原清公が大学寮で影響力を持つ／琵琶の名手藤原真敏が中国で高く評価される／円仁が入唐し残留を決意する／円仁の中国語は通じたか／空海は漢文能力が高かった／円仁の遺産は幅広い

2 一日中間の交流は活発であった 125

外国船が頻繁に到来する／惠萼が外国船で日中を往来する／『白氏文集』が将来される／惠萼は四回以上は唐に渡った／中国では仏教が衰退していく／惠萼の活動範囲は幅が広い／惠萼が普陀山を開いた／遣唐使が停止される

3 漢文の世界が多様化する 134

大学寮で文章博士の地位が高まる／博士家の世襲化が進む／漢音が奨励される／漢音が定着していく／より新しい漢音が伝えられる／漢文の訓読が一般化する／訓読の書き込みが始まる／句読点・返り点が用いられる／声点・濁点が付けられる／さまざまな符号も記入される／訓読が固定化する／漢文訓読語と和文語とが対立する／九世紀末には一五〇〇以上の漢籍が将来されていた／『文華秀麗集』が女性作の漢詩を載せる／記録体が出る

4 女性も漢語を駆使する 150

漢語の使用が広まっていく／博士家の娘が漢語を多用する／漢文は女性の教養でもある／勤子内親王が『和名類聚抄』の編集を命じる／女房が『遊仙窟』を引用する／『白氏文集』が『源氏物語』に影響を与える

5 漢字から仮名が作られる 158

書が重んじられる／万葉仮名が草書で書かれる／平仮名が成立する／平仮名は女手とも呼ばれる／漢和辞典が初めて作られる／『新撰字鏡』が国字を載せる／大衆的な漢和辞典の先駆けが成立する

第4章 漢字が展開する 一三〇―一六世紀

1 一和漢が混淆する 168

慈円が再度天台座主に就く／『愚管抄』が漢字片仮名交じり文で書かれる／和語を仮名で書いた文こそが理解しやすい／仏教の教えが仮名で説かれる／片仮名の使用が広まる／漢字に仮名を交える表記が定着する／和漢混淆文が成立する／多様な往来物が作られる／真名本が生まれる／『平家物語』を漢字だけで記す

2 一禅宗が普及する 180

宋との往来が活発になる／明と勘合貿易が行われる／僧侶が頻繁に入宋する／栄西が臨済宗をもたらす／道元が曹洞宗を伝える／多くの僧侶が元に留学する／入明僧が次第に減少する／来日した僧が大いに活躍する／鎌倉幕府が禅宗を重視する／一山一寧が広く尊敬される

3 一五山文学が隆盛を極める 191

純粹な漢文が求められる／五山で文学が盛んになる／一休宗純が登場する／五山が衰退する／朱子学が五山で講じられる／漢文の注釈を筆記する／漢字を省画する書き方が広まる／博士家では家説を秘伝とする／地方で中国研究の気運が高まる／新しい訓法が提唱される／北条実時が金沢文庫を創設する／上杉憲実が足利学校を中興する

4 一 唐音が用いられる 204

中国江南の音が唐音として伝わる／入声韻尾が消滅する／キヤツツ（脚立）と発音される／「炬燵（こたつ）」
がでかあがる／「鸚哥（いんこ）」が伝来する／リ韻尾がんと書かれる／字音が日本で独自に変化する

5 一 印刷が始まる 210

書道が誕生する／和様が生じる／古筆が珍重される／版経が出現する／中国人の彫工が活躍する／金属活字が
伝来する／半濁点が用いられる

第5章 漢字が普及する 一七〇—一九世紀中頃

1 一 商業出版が出現する 220

古活字版が印刷される／徳川家康が活字印刷を命じる／銅活字が作られる／和書が活字出版される／豪華活字
本が製作される／商業出版が成立する／ベストセラーが出現する／江戸が出版の中心になる／貸本屋が活躍す
る

2 一 儒学が広く学ばれる 231

庶民教育が盛んになる／寺子屋教育が普及する／儒学が広く学ばれる／徳川家康が儒学者を重用する／藩校や

私塾が設立される

3 一 唐通事・黄檗僧が活躍する 236

長崎が唯一の海外貿易港となる／唐通事が長崎に置かれる／唐通事は家業として世襲される／清と盛んに交易する／明・清から僧侶が来日する／隠元が黄檗宗を伝える／心越が徳川光圀に庇護される／黄檗宗が各地に広まる／了翁・鉄眼が活躍する

4 一 唐話が流行する 247

徳川綱吉が天和の治を致す／柳沢吉保は学問を好んだ／荻生徂徠が柳沢吉保に仕える／徂徠は政治と文芸を重んじる／伝統的な漢文訓読を否定する／徂徠が中国口語を学ぶ／岡島冠山が徂徠の研究会に招かれる／冠山が唐話を教授する／冠山は新たな小説を志していた／白話小説が流行する／文雄が『磨光韻鏡』を著す／本居宣長が字音仮名遣いを提唱する

5 一 文人が輩出する 261

『唐詩選』の評価が高まる／儒者が文人化する／女流漢詩人が活躍する／江馬細香が詩に生きる／漢文の戯作が出現する／『唐詩笑』が出版される／狂詩が大評判となる／節用集が庶民に利用される／さまざまな辞書が出版される

第6章 漢字が大衆化する 一九世紀中頃以降

1 明朝体が用いられる 274

明朝体が製作される／明朝体の製作法が改良される／日本に明朝体が伝わる／築地体・秀英体が作られる／出版が大衆化する／近代的な漢和辞典が登場する／諸橋轍次が『大漢和辞典』を編集する

2 漢語が急増する 281

小学校で漢字が教えられる／教育漢字が公布される／書き順は一つだけではない／大量の漢語が作られる／近代中国語を表記に用いる／漢字を当てて書く

3 漢字制限が提唱される 288

漢字御廃止之議が建白される／『まいにち ひらがな しんぶんし』が創刊される／福沢諭吉が漢字制限を唱える／矢野龍渓が漢字制限の実施を明言する／使用漢字の目安が示される／漢字節減の標準が議論される／国語調査委員会が設置される／字体整理案が発表される／新聞社が漢字制限を提案する／常用漢字の実施が不可能となる／標準漢字表が提案される

4 当用漢字表が告示される 302

索

引

319

敗戦直後、漢字廃止が主張される／当用漢字表が告示される／漢字字体が整えられる／書き換えが実施される／常用漢字表が告示される／新聞社は独自に対応する／人名用漢字が公布される／JIS漢字が制定される／常用漢字表が改定される／漢字出現頻度数を七〇年前と比較する／日中の漢字使用数を対照する／日本語の国際化に向けて漢字使用を見直す